

九州大学附属図書館蔵『狭衣抄』解題

田村, 隆
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/8986>

出版情報 : 文献探究. 40, pp.79-98, 2002-08-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



九州大学附属図書館蔵『狭衣抄』解題

田村 隆

一

九州大学附属図書館の音無文庫に『狭衣抄』と題する『狭衣物語』の注釈書がある。この物語の古注釈書は数少なく、『岩波講座日本文

学』『狭衣物語』(入江相政氏)に挙げられた、

狭衣下紐(したひも) (天正十八年(一五九〇)) 里村紹巴(さとむら)

狭衣文談 (文禄三年(一五九四)) 伝三条西実隆(さんじょう)

狭衣物語抄 (天和二年(一六八二)) 猪苗代兼寿(いぬぼ)

狭衣物語入紐(いれひも) (天和二、三年) 川村秀根(かわむら)

などがあるに過ぎないが、『狭衣抄』は内容的に三番目の『狭衣物語抄』に一致する。本稿ではこの注釈書についての解題を記す。

まず諸本について述べる。『国書総目録』に拠れば、『狭衣物語抄』の名で国会図書館と京都大学が所蔵するとしているが、京大本は国会本を大正八年に書写したものであり、今回の考察からは外した。また、近年、川崎佐知子氏によって、新たに二本が紹介された。それによれば、

・国会図書館本

四卷二冊。外題「狭衣物語抄 乾(坤)」(打付外題)。内題な

し。「天和二年林鐘上旬 法眼兼寿」の奥書あり。

・宮城県図書館伊達文庫本

四卷二冊。外題「さころも抄 上(下)」(題念)。内題なし。

「宮城県図書館伊達文庫」、「伊達観瀾閣図書館」印。

・阪本龍門文庫本

四卷二冊。外題「狭衣抄 上(下)」(題念)。内題なし。「芸叢」

「芸叢之印」、「龍門文庫」印。田村建頭(たけがね)の識語あり。

二本とも九大本と同じく外題は「狭衣抄」であり、「狭衣物語抄」

となっているものは国会本のみである。これらを加えて数えると、九大本は現存のものでは四本目ということになる。

ここで九大本の書誌を述べておく(あわせて口絵も参照されたい)。

書型 大本一冊。写本。

表紙 濃縹色無紋表紙(縦二七・九センチ 横二〇・二センチ)。

原装。右下に請求番号用紙五四五サ一。

題念 左肩「狭衣抄 完」と墨書する書題念(縦一八・九センチ

横三・七センチ)。

行数 每半葉十五行。

字高 二十四・三センチ。

料紙 楮紙。

構成 丁数 遊紙一丁、(狭衣巻一注釈本文) 三二丁、(巻二注釈本文) 二八丁半、白紙半丁、遊紙二丁、(巻三注釈本文) 三〇丁半、(巻四注釈本文) 三三三丁、白紙半丁、「狭衣物語景図」七丁、「狭衣物語年立」八丁、白紙半丁、遊紙二丁、計一四三丁。

奥書・識語 なし。

蔵書印 本文初丁上部に「寺尾ノ寿ノ所蔵」(朱文陽刻)、「九州帝ノ国大学ノ図書印」(朱文陽刻)、九州大学受入印(昭和五年三月十五日)、右下に「首無文庫」(朱文陽刻)、「牘庫」(朱文陽刻)。

備考 裏見返し左下に「改墨附百四十一丁 改百四十一丁」「卯百五十二 ムイコロ」。

本文は全て同筆。

下小口に「さころも」と墨書。

本文に朱墨の見せ消ち及び書き入れあり。

遊紙部分に二箇所、蔵書印の切抜き跡あり。

九大本の外形的特徴として注目すべきは、まず他本にある識語の類が全く見られない点、系図と年立を備えている点である。また、四本中唯一、一冊本である点も注目される。但し、この本も巻二と巻三の間、すなわち他本が上下巻に分かれる箇所には遊紙があり、本来の姿としては二冊本であったことも窺わせるのである。

そして、最も重要な点は、「牘庫」の蔵書印がある点である(図一)。この「牘庫」は奥州岩城平七万石の城主、内藤左京亮義概(俳号「風虎」)

の蔵書印で、この蔵書印があることから九大本の筋の良さがわかる。「国立国会図書館蔵書印譜」(「日本書誌学大系 七〇」青裳堂書店、一九九五年)にも次のような記述がある。

蔵書印を調べはじめると、まもなく知るうちの一つにこの特異な分銅型の蔵書印に、逢着するものである。この印の捺されている本は、比較的古い本であり、またきれいな本が少なくない。なかには蜀山人、屋代弘賢などの蔵書印が見られる本もあつたりする。従つて、これは目のきく、相当な蔵書家であるつと、頭にひらめくことと相なってくる。そこで、参考書を披いて見ると、磐城平(七万石)六代の藩主内藤風虎と出ている。なるほど、さもあらんと、藩史を考え、風虎の文芸サロンを想うと、改めて、その蔵書印を持つ本は、なつかしくも感じられ、親近感を覚え、当時の状況様子がなんとなく感じられてくる。

風虎については岡田利兵衛氏²⁾や、壇上正孝氏³⁾に論考があるが、壇上氏によれば、風虎の「牘庫」印はその基本型のみで九種もあり、それぞれ使用された時期が異なるという。氏の論文に挙げられた九種のサンプルと九大本の「牘庫」印とを見比べてみたところ、氏の分類ではB1に属すると思われる。B1については、風虎のみでなく子息の露沾も使用した形跡があるらしいけれども、それでも江戸前中期頃とは認めることができ、いずれにせよこの蔵書印が大きくな手がかりとなることは疑いない。



図1 牘庫印

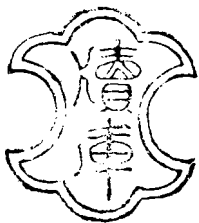


図2 蔵書印譜

『狭衣物語』の注釈書は、冒頭にも掲げた『狭衣下紐』(以下、『下紐』と略す)をもって嚆矢とする。『狭衣抄』は、すでに指摘されるとおり、この『下紐』に多くを負っており、単なる引き写しにすぎない部分もかなりある。そのせいもあって「内容はやはり大した事もない」(入江相政氏)という評価もかつてはなされたのである。

作者猪苗代兼寿は、兼載から数えて八代目にあたる、仙台伊達藩のお抱え連歌師である。猪苗代家の事跡については、綿拔豊昭『近世前期猪苗代家の研究』(「新典社研究叢書 一一四」新典社、平成十年)に詳細な研究があり、兼寿についての記述を次に要約する。兼寿は、生年は寛永六年(一六二九)で、隣松軒と称した。延宝七年七月二十三日には猪苗代家で初めて法眼(ほうげん)に叙せられている(「伊達治家記録」)。元禄七年五月八日に没した。兼寿は、古典に対して造詣が深く、元禄四年に古今伝授を、さらに『伊勢物語』、『源氏物語』の伝授とともに近衛基熙から受けている。——尚、兼如の孫という点も後に述べるように注目すべきである。兼寿にせよ、風虎にせよ凡そこの注釈書は伊達家を核とする奥州のサロンを舞台に流布したことが窺え、猪苗代家と内藤家との関わりも推測されるところである。

『下紐』については、小高敏郎氏の『近世初期文壇の研究』をはじめ、すでに中田剛直氏や川崎氏に詳しい研究があるが、川崎氏によれば『下紐』の注釈項目は、承応版本で二二三八項目であるという。試みに『狭衣抄』の項目数を数えると、二二〇二項目であり、およそ『下紐』の倍近くにのぼる。

これらが皆単なる引き写しで終わっていれば、この注釈書にさした

る意味を見出すことはできまいが、『狭衣抄』は『下紐』に次いで成立した注釈書『狭衣文談』と異なり、時折新見を披露することがある。それについて紹介したいと思う。

まず、「引哥未勘」について。『下紐』の「引哥未勘」は次の二十二項目である。

むろのやしま・十市の里・をとほの山にはなど・ちくま川・かよはぬ里・ありてうき世・岩間の水・こざらましかは・かりのはかせ・もりのつつせみ・かすまん空の・をのれつらく・むさしの・袖の中にや・あらばあふ世・やすの河原・かすまん・をのがつま・八重たつ山の・岩間をくぐる水・いふとも人に・物としらずや

川崎氏が指摘するように、これらの内のいくつかについて、『狭衣抄』は例えば、

・かすまん空の名残計にては はかなくて雲となりぬる物ならばかすまん方をあはれとはみよ 小町 (三六ウ)

の如く、新たに引歌を見出している。

また、その注釈態度の一端をかいまみる点を指摘しておく。『狭衣抄』には、「下紐説いか」という形で『下紐』に疑義を呈している箇所がある。この点については久下晴康氏がすでに触れているが、より細かく調べると、まず「下紐説」と明記するものが次に掲げる如く十六例。

・ちやうしにくるむまで そゝきたるはこく染たる心灑の字なるへし下紐説色そと切てそきたるとよませたり如何一本そめたと有 (五オ)

・かねていみしう やむことなき方に内々心を尽して逢給たるよりもめつらしくて此女に心のとまる也下紐に源氏宮のことあり

如何たれにてもか様の事有とみるへし (一六才)

・花かつみ 飛鳥井君哥如此みるたにあかぬ物を奥列へ下らは打語
て逢みるましきとの心也浅香沼奥列也下紐説いか、 (二〇才)

・かの后宮の人々も 一条院皇太后宮也東院上の御姉也下紐説いか
、 (二二才)

・道行人事には かりそめこと云心也下紐説いか、 (二八才)

・わか君をこそ 中納言殿をこそ世上の女のこひかなしめと也下紐
説いか、 (二八才)

・又の日いつしか御ふみつかはしたるに 夢の翌日と下紐に有いか
、夢の翌日は飛鳥井の哥の贈答あり其翌日也 (二九才)

・木の丸殿を聞たかへさせ われは仇なる心は無物を名のりを聞た
かへ給へるかと云心なるへし下紐説かなひかたし (三七才)

・いつもくなにことにてか 中納言風おこりてと前有此事なりと
下紐に有いか、女二宮御乳母病氣にて夜部をりたる由見えたり
其詞にあやしきわさかなよもにさへなりぬるにやと有此人おま
へにあたりし故此あやまちも有けると大宮のおほしめして此時

の給へるなるへし (三八才)

・此御ことはよろつに 二宮との御事あしきこととは日比もおもひ
給はぬ也今はまして不恋に一よ会給しまてにては勅定のかたし

けなき方女二宮のくるしうおほしめされむことかたく打そへて
やめかたき也さりとて又二宮定り給はむことも源氏宮をむなし

くなさん事の口おしき也二かたに心の定かたきは畢竟わか心の
つきなきすさみにて二宮へ逢給し故なりと物こりし給と云心な
るへし下紐説聞侍かたし (三九才)

・つくり置聞えさせけん 君みればむすぶの袖そうらめしきつれな

き人をなに作りけん源氏宮のつれなきを云り下紐いか、 (四
六才)

・大やけわたくしにつけて 中宮は後の春宮の御母堀川殿の御姫な
れは公私たのもしきとはの給へり下紐説いか、 (五一才)

・下りにし大ニの家に 下紐に筑紫より帰京して三河へ又くたりし
歟と有如何大ニまた帰京せず筑紫へ下りしま、也三河守にな
りしは大ニか子の道成也 (五三才)

・おか見わたすにても 下紐齋院の事と有いか、入道宮の事也なれ
近つかすしてよそくにてもト云心也 (六二才)

・けふあすにても世をそむきなんとこそおほしめりたれ さ衣の事
と下紐に有いか、一品宮の事也 (七〇才)

・をくれしと さ衣哥たかひにをくれしと契し物をわれはのこりぬ
飛鳥井君は死手山三途川に侍覽と云心なるへし下紐説いか、
(八〇才)

その他に、ただ「如何」とのみあるものも散見される。

・我心にもおとろかせ給 さ衣の心とあり如此、(他本「如何」)是より
御袖もしほる計迄先帝の御ことなるへし

・宮の中將にこそ 少将兄と也ト有如何少将任中將二と見えたり非
別人

はじめの例は「下紐」に、

・おととの いましくおぼさんは中將の心、御袖は天子なるべ
し

とあるのを受けての言と解することもできるが、後の例の「如何」に
ついてはそもそも「下紐」にはない項目であり、この「少将兄」説は

「下紐」を指したものでない。出典を明記しないという特徴などが

ら考えると、例えば承応三年刊の版本『狭衣』に見られる傍注「少将の兄也」などに拠ったかと考えられる。この辺り、承応版における傍注の付し方と、『狭衣抄』の立項の仕方が大変類似しており、一層その印象を強める。そして、そのつもりで見れば、はじめの例も承応版本文「わがこゝちにも」の傍らに「狭衣中将心」とある方が、より『狭衣抄』の記述に近いことがわかるのである。『狭衣抄』が用いた資料としてはこれまで専ら『下組』のみが言われてきたが、承応版についてもその影響を十分に考慮することが必要であろう。

さらに、『源氏物語』注釈書との関係について、問題を一つ指摘しておきたい。『狭衣物語』巻一にこのような場面がある。本文は「日本古典全書」(元和九年刊古活字版を底本とする)による。

げにすさまじきものに言ひ置きたる師走の月も、見る人がらにや、宵過ぎて出づる影さやかに澄み渡りて、雪少し降りたる空の景色の冴え渡りたるも、言ひ知らず心細げなるに、小夜千鳥さへ妻呼び渡るに、貴之が「妹が行けは」と詠みけむも羨ましく詠め侘び給ふに、

「すさまじきものに言ひ置きたる師走の月」という表現について、『狭衣抄』の注はかくである。

・冷しき物にいひ置たる 清少納言枕双子に有と云り当時流布の本
二なし此事源氏物語二も出 (四五ウ)

この部分、深川本の本文では「世にはすさまじき物と言ひ古したる」とあり、『狭衣抄』がやはり流布本系の『狭衣物語』本文に拠っていることが窺えるが、さて注の内容は、師走の月は「すさまじき」ものだとする記述が『枕草子』と『源氏物語』に見られるといつのである。該当する『源氏物語』朝顔巻の本文を掲げておこう。

雪のいたう降り積りたる上に、いまも散りつゝ、松と竹とのけぢめおかしう見ゆる夕暮れに、人の御かたちも光まさりて見ゆ。「時く」につけても、人の心をつつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきもの身にしてみても、この世のほかの事まで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬおりなれ。すさまじきために言ひをきけむ人の心あささよ」とて、御簾巻き上げさせ給ふ。

この冬の月への指摘は早く『紫明抄』が、

・冬の夜のすめる月に 清小納言枕草子云すさまじき物しはすの月よおつなけしやうとしよりたる女也

とするが、実は現存の『枕草子』にかくの如き記述はないのである。

それに関して、『永祿奥書 源氏物語紹巴抄』は、

・すさまじきためし 清少納言紫式部と同時の人にていとみし也紫は如此かける也清少枕双にしはすの月なし小野篁記にありとか
けり枕双紙には無之

とするが、行間書入に「私 枕草二右ノ事ある本となき本あるか誠なるへし」とあるのは『狭衣抄』の注に似ていると言えないだろうか。

そしてこの書入をなしたのは『狭衣抄』作者猪苗代兼寿の祖父兼如なのである。この兼如書入の『紹巴抄』と『狭衣抄』とは、相関関係を認められるのではなからうか。綿抜氏の指摘にあるように、兼寿が古今伝授や源氏学に関心を抱いていたことを思えば、今みた注は、猪苗代家の「古典学」の一端を示していると言つことができよう。

次に諸本の異同の検討を通して、九大本の位置を考える。

概して、九大本には単純な誤写が目立つ。例えば巻一で言えば、冒頭の「少年の春は」についての注で、「此発言」とあるべき所を「此発言」とし、あるいは他本において「源氏宮に似たる」(四才)とする箇所を「源氏ににたる」と「宮」を落したり、「との」女「二宮に」(一一ウ)とあるべき所を「との」女「三宮に」と書き誤つたりする。また、少数ながら、項目ごと落としてしまうこともある。これらを含め、仮に国会本と比べると、以下に翻刻する巻一(上)部分だけでも四十箇所程度の小さな異同があるが、そのほとんどは物語本文と照らし合わせれば訂正できる単純な誤写であり、特に大きな異同はないと言つて良い。

ただし、細かに吟味すれば、九大本が提起する問題もいくつかある。一つは書入の問題である。九大本には四箇所にわたり、注釈本文の上部に小字で書入がなされている。次に記しておく。

- ・ 中宮とさ衣は御兄弟なれば疾妬の心にて狭衣の事をもよからす母
 後の思召故にかたりなし給なるへし (一一ウ「大宮聞給てめ
 さましく有ましきこと」むつかり給ける物を」の項)
- ・ 尺迦越経^二説^三弟^一子事^レ師^二有^二五事^一其^三三士所^レ教随^レ之^二
 (一四才「師にはしたかへと云法文」の項)
- ・ 浮舟巻すゝるなるけんそうの人をさへ花鳥にけさうは見所ノ人ヲ
 云ニヤソハアタリノ人ヲケンソト云ヘシトアリ此心叶ヘル歟
 (一八才「けんそ」の項・朱書による書入)

・ 香山寺 白

願^ハ以^二今生世俗ノ文字業狂言綺語^ヲ讚^一 (他本「誤」翻^テ為^二當来世讚
 佛ノ棄之因^レ法輪之縁^一)

洛中記曰白居易以^二所作文章^ヲ移^レ置^二香山寺^一經藏^二之席也^一轉法
 輪之縁トツキタル詞此席ヨリ出タリ (三九ウ「當来世に轉
 法輪のゑん」の項)

この書入は、いったん固定した注釈本文に、後に考察した内容を加えたものと考えられ、九大本の草稿本的性格を示すものである。書入をそのまま書入として写した点にも忠実な書写態度が窺えよう。この四箇所が、国会本ではいずれも注釈本文に組み込まれている。

ただし、伊達文庫本と龍門文庫本にはこの他に、更に二つの書入が存する。伊達文庫本により引用する。

・ 陰陽家二晝用トテ晦日月ヲ用事アリト云ニ又真言教ニモ金剛薩
 ヲ晦合宿ノ月ニタトヘラレタリ (五二ウ「月もさやかならぬ」
 の項)

・ 病人至秋^二魔王宮者行此法或経^テ七日或^二二十一日或^二三十五日或^二四
 十九日^一蘇生事薬師本願経見エタリ (八九ウ「薬師法」の項)
 この事情を考え合せれば、九大本の位置はその二つの書入が組み込まれた段階ということになる。そして全てが組み込まれた清書本性格を持つのが国会本である。伊達文庫本と龍門文庫本の関係については、川崎氏が本文訂正の跡などから伊達文庫本を先と認めており、さらに綿抜氏が「奥書もあり、筆跡から推しても兼寿自身と思われる」と述べるのに従えば、「狭衣抄」の諸本は現存のものでは伊達文庫本・龍門文庫本・九大本・国会本の順に書写されているということができ
 る。

それから、九大本には所々に一字分の奇妙な欠字がある。その部分

は空白のままであり、単なる誤脱とは思われない。欠字の箇所を今仮に で示せば、

・ なたかちにそ 父公も中宮故坊門上の御かたのみにおはします也 (一一二ウ)

・ なき物あつかひこのみ 東院上の事を父公の詞 (二三オ)

・ しかくなんと申 事は 狭衣へ此宿也躰を文の申也 (二九ウ) の如くである。その理由は判然としないが、項目の語頭にもしばしば見られる現象であるので特に記しておく。

三点目に、この九大本は注釈本文とは別に系図と年立を付すと先に述べたが、系図の末尾には、

此物語之作者大貳三位と云つたへたり時代たしかならず一条院寛弘の比源氏物語つくれり四十年計後歟

高藤 実方 朝頼 為輔 宣孝 女子 大三位是也 母八紫式部 後

一条院御乳母大貳成章妻也

景図八道遥院内府御作ト云リ

と記されている。これは、龍門文庫蔵『狭衣系図並年立』にも見られるものであるが、ただし龍門文庫本にある「此抄下紐八作者不知」の

此物語之作者大貳三位と云つたへたり時代
高藤 実方 朝頼 為輔 宣孝 女子 大三位是也
母八紫式部 後 一条院御乳母大貳成章妻也

高藤 実方 朝頼 為輔 宣孝 女子 大三位是也
母八紫式部 後 一条院御乳母大貳成章妻也
景図八道遥院内府御作ト云リ

図3 景 図

一行が、九大本にはない。単なる誤脱とも考えられるが、あるいは本来「下紐」に付されていた系図を『狭衣抄』に移すにあたって、「下紐」の名を持ち出すことの不自然さから、九大本書写者が故意に削ったという可能性もある。おそらくは後者であろう¹⁾。

そして、諸本を比べたときに、説明の難しい箇所が一つある。それは『狭衣物語』巻四にある、狭衣(今上帝)の歌、

かなしさもあはれも君につきはてゝこはまたおもふものとしらぬを
についての注、

・ かなしさも 今上の御哥 御愛憐の心は若宮につくし給ひて此外
に思物とは知給はぬと也 (一一七ウ)

の項である。この項、「下紐」にもあり、「こは、是は也。又、子もかねて也」と注する。

これまでに九大本が他本にある項目を時に脱することは述べた。ところが、この項目は、逆に九大本・龍門文庫本・国会本にあつて伊達文庫本にないのである。伊達文庫本ではこの項をとはして、次の「女宮にせまほしう」の項目が並ぶ。川崎氏は、伊達文庫本には「作者の模索の過程が残っている」として、この注釈書が二段階に渡つて成立したことを述べるが、いったん伊達文庫本が完成した後も、一箇所とはいえこのような増補があつたことに注目しておきたい。

注

(1) 川崎佐知子「猪苗代兼寿『狭衣物語抄』に関する考察」『古代中世文学研究 究論集第一集』和泉書院、平成八年。
(2) 岡田利兵衛「内藤風虎」『国語と国文学』三十四、昭和三十二年。

(3) 壇上正孝「風虎内藤義概の生涯と文業」、『広島大学学校教育学部紀要』第二部六号、昭和五十八年。

(4) B1のサンプルは、前掲『国立国会図書館蔵書印譜』に挙げられたものである。本書により引用する(図二)。

(5) 明治書院、昭和三十九年。

(6) 中田剛直「狭衣下紐諸本考」、『永山勇博士退官記念国語国文学論集』風聞書房、昭和四十九年。

(7) 川崎佐知子「狭衣下紐 諸本考」、『中古文学』五十五、平成七年。

同 「狭衣下紐」の基礎的背景』、『詞林』十七、平成七年。

同 「狭衣下紐」の基礎資料と注釈方法』、『語文』七十三、平成十一年。

他に、齋木泰孝『物語文学の方法と注釈』(和泉書院、平成八年)など。

(8) 『狭衣文談』については、実践女子大学『別冊年報』第五号(平成十三年)より、常盤松本の翻刻掲載が始まっている。

(9) 久下晴康「猪苗代家と源氏物語」、『中古文学論攷』三、昭和五十七年十月。

(10) この前後、『狭衣物語』本文の出入りが激しいことが原因か。例えば「下紐」に「又ある本」の項があつて『狭衣抄』にないのも、注釈項目の選択というよりは依拠した本文を異にするからだと思う。

(11) 『平安文学資料稿 第二期』(広島平安文学研究会)による。

(12) 稲賀敬二「源氏物語紹巴抄」と兼如——永禄奥書本資料——』、『連歌と中世文芸』角川書店、一九七七年。

(13) 龍門文庫本について、『龍門文庫善本書目』(川瀬一馬編、昭和五十七年)の記載事項を記しておく。

七四四 狭衣抄 二巻

天和三年写。每半葉十三行平仮名交り。字面の高き約七寸二分。巻末に

此物語諸本不同不辨何是非只集多本就多分聊需其理而已本歌本説等多未能考^ス先達乃好土候補之矣

天和二年林鐘上旬 法眼兼壽

以右奥書之本書写之彼正本達 新院御所 叡聞被召之被納御文庫云々

認兼壽為道之冥加者歟

天和三曆六月日 豊部子

の原識語並びに田村宗永の手識がある。各冊首に「芸叢之印」各冊末に「芸叢」の朱印記を捺す。大本。各冊に「狭衣抄上(下)」の原題簽がある。

七四五 狭衣系図並年立

一冊

江戸初期写。別蔵天和三年写狭衣抄と共に伝写せられたもので、同装同筆である。巻首に「芸叢之印」、巻末に「芸叢」朱印記を捺す。大本。

(14) 「下紐」の作者は、この系図に「作者不知」と記されるように、かつて未詳とされていた(白水生「見るにしがひて」、『藝文』大正九年十一月)。

翻 刻

凡 例

一、底本には、九州大学附属図書館蔵『狭衣抄』を用いた。紙幅の都合上、『日本古典全書 狭衣物語』(朝日新聞社、昭和四十年)の巻一(上)に相当する部分のみを掲載する。

一、本文の表記については、漢字、仮名などなるべく原文のままとしたが、漢字の字体は一部現行字体によった。

一、校異については、仮名遣の相違等には触れず、主な異同のみを示した。

一、誤謬と考えられる箇所には(ママ)の符号を付し、他本との校異を後に示した。(伊)(龍)(国)はそれぞれ伊達文庫本・龍門文庫本・国会本の略号である。なお、これら三本に共通する異文は(他本)の略号で示した。その場合の本文は原則として国会本による。

一、各項目に通し番号を付した。

一、各項目の下に、「日本古典全書」本の頁行数を示した。

- 1 少年の春は(一八五1) 此発書踏花同惜少年春 これにてかけり
少年春若年の心也狭衣君の事をふくめり
- 2 松にとのみおもはず(一八五3) 夏にこそ咲かゝりけれ藤の花ま
つにとのみもおもひけるかな
- 3 山時鳥待かほなるに(一八五3) 我やとのいけの藤なみ咲にけり
やまほとゝきすいつかきなかむ
- 4 井手のわたりにことならず(一八五4) 春の池や井手の河せにか
よふらむ岸の山吹底も匂へり源氏こてふの巻の傍也
- 5 さふらひわらは(一八五5) 侍の童也 源氏にあり
- 6 源氏宮(一八五5) 狭衣君のいとこ後二くわし
- 7 中納言中将(一八五6) 此二人源氏宮宮女也
- 8 かきすさひて(一八五7) 書終ての心なり
- 9 そひふさせ給へる(一八五7) かたはらふしたる心也
- 10 春宮(一八五8) 後一条院也(一才)
- 11 藤のしなひ(一八六1) 級と書かたくたりとよめり
- 12 花こそ花(一八六4) 古哥未考此詞をとりて定家卿 匂ふより春
そくれ行山吹の花こそ花の中につられ
- 13 口なしにしも(一八六7) 山吹の花色衣ぬしやたれとへとこたへ
す口なしにして源氏宮への思ひを口外に出しかたき心也
- 14 言のははおほく(一八六9) 口なしとの給へとも此花を愛る言葉
はおほきと狭衣の下の心をしらて中納言の云る也
- 15 いかにせん哥(一八六10) 狭衣の心を山吹の口なしにたとへて独

吟なり

- 16 たつをたまきのと(一八六11) 奥山にたつをた巻のゆふたすきか
けておもはぬ時のまうなき
- 17 室の八しま(一八六13) いかてかは思ひ有とも知すへき室の八島
のけふりならては 実方
- 18 心くるしきや(一八六14) もやの柱と云より心くるしきや迄双地
と見えたり
- 19 二葉より(一八七1) 狭衣 源氏宮幼生より無隔心て今(一ウ)
更好色を恥たまふ也
- 20 ひとついもせ(一八七2) 兄弟を云 後撰 むつまじき妹せの山の
中にさへへたつる雲のはれすもあるかな是も兄弟をいへり
- 21 大殿宮なともたくひなき御心さしといひながら(一八七5) 狭衣
を御寵愛とは云ながら源氏宮の事は承引有ましきと狭衣の心中也
- 22 いまはしめ(一八七10) 是よりわさなりけれと有まで草子ち也
- 23 当帝(一八七14) 嵯峨院也
- 24 故院(一八八2) 円融院をさす也
- 25 打かはりみかたとゝ(一八八2) 帝に替りて政をとらしむるこ
ろなり
- 26 御ゆかりはなれす(一八八5) 堀川殿の近ゆかりなるへし 前齋
宮狭衣君の御母也
- 27 今のおほき大殿(一八八6) 後一条院の外祖父也(二才)
- 28 式部卿の宮(一八八8) 先帝の御子也
- 29 今上の一宮(一八八11) 嵯峨院の御子後に東宮也
- 30 齋宮はおやさま(一八八13) 堀河殿齋宮を子のやうにもてなして
あつかり給也

- 31 おとこ君さへ(一八八15) 狭衣君也
- 32 千人の中にたに(一八九1) 多羅尼品 訶利帝母千人の子有
- 33 二位中将(一八九3) 甚規模の撰関の子の外不任よし也
- 34 第十六我釋迦牟尼佛(一八九9) 化城喻品 三千塵點功昔大通智勝佛
と申佛まし／＼ける此佛いまた王位の御時御子十六人有成道の後
佛所へ詣して御弟子となり給ひぬ入滅の後十六人菩薩達衆生を利
益して十方にして佛に成たまへり 第十六番めの御子則此沙婆世
界にして成道をとなへ給へり即今日の尺迦如来也狭衣君を佛の出
世にたとへたる詞なり(二二ウ)
- 35 おほふはかりの袖(一八九12) 大空におほふ計の袖もかな春さく
花をかせにまかせし
- 36 ありてふ人は(一九〇6) 世にありと云人は也
- 37 かことはかりの(一九〇10) そとはかり也
- 38 入ぬる磯の(一九〇12) 汐みてはいりぬる磯の草なれやみらくす
くなくこふらくのおほき
- 39 いとも恨所なく(一九〇14) したしくし給はぬによりてうらむへ
き所のなき也
- 40 いなふちの灌(一九一3) 大和也 年をふるなみたかいかにあふ事
は猶いなふちの灌まされとや 源真氏 此哥を引りいかゝ本哥にあ
らす此作者に物語の後也猶可勸
- 41 野をなつかしみ(一九一5) 春のゝに重つみにとこし我そ野をな
つかしみ一夜ねにける詞計か
- 42 一見於女人(一九一6) 梵網經二卷花巖經之結之經也 一タ見於
女人ヲ能ク失フ眼ノ功德 梵網經上卷アリ (二三才)
- 43 えたて給はぬなめりかし(一九一7) のそきて女を見給心也

- 44 いかてかおはせさらむ(一九一8) 經文のことくにたゞしくは得
し給はぬとなり
- 45 あやしきたに(一九一8) すかれていやしき心也
- 46 雲ををひ／＼かし(一九一15) 源氏桐壺卷此詞有
- 47 天地をもうこかし(一九一15) 琴の音妙なる事うつほ物かたりに
見えたり
- 48 あまの羽衣(一九二8) 五月五日横笛の席也
- 49 なすらへなる人有南や(一九三1) 源氏宮にゝたるも有ぬへきと
の心也
- 50 彼よしかたか隠みのを(一九三2) 古物語と見えたり
- 51 いたゝのはしはくつれと(一九三3) 万撰列 をはたゝの板田の
橋のこほれなはけたよりゆかむこふなわきもこ 源氏ににたるも
あるかとかいまみし給心也
- 52 をとなしの灌(一九三7) 紀列 城列 音なしの河とそつゐになかれ出
る(三ウ) いはて物思ふ袖のなみたは 元輔
- 53 忍ふもちすり(一九三9) たれゆへに如此なると書事を知給はぬ
成へし
- 54 おほきおとゝの御方には(一九三10) 堀川殿北方洞院上は大政大
臣の御娘なれば如此云り
- 55 いかにかやうの人おはせて(一九三10) 実子養子ともになき也今
姫君の事を書へき席也
- 56 昔の御ゆこん(一九三14) 先帝
- 57 いとゞしき御有さまを(一九四2) 源氏宮すくれたる御形ちなれ
は今少も御生長ならはいよくよからんと思召也
- 58 おほし置つる御有さまなるへし(一九四3) 堀川殿の心中を草子

地也

59 十市の里のこひ路(一九四六) 引哥ある歎未勸 只遠の心計歎遠

き心計に用たる詞奥にも有こひちは土泥にぬれたるほどを狭衣の
心中に思ひあはせらるゝなるへしあしもとゝ云にて泥の心あらは
なり(四才) 一本いかはかり十市の里の恋のもちふならんと
有もちふは持文也^{上有}

60 うきしつみ哥(一九四九) 源氏宮を恋給心を人の知さると也しら
ぬは白浪也

61 かほなとも見えぬ迄(一九四一) 菖蒲をおほく持たる躰也

62 ならひにてさふらへは(一九四一五) 隨身返答也

63 扇を笛に吹給へる(一九五四) 扇にて笛のまねして吹る俗にする
也

64 はしとみ(一九五五) 源氏夕貞巻の佛也

65 あはれあれらか身にてたにあらは(一九五八) 狭衣君の隨身にて

もあらは何ことをかおもはんと女房共云也

66 しらぬまの哥(一九五十四) 蓬か門女の家をさして云也

67 かたかなにて(一九六一) 源氏になき詞也草の文字を云俗に大

和仮名と云物と也

68 見もわけて哥(一九六三) 菖蒲をひまなく茨しゆへみ分さりしと
也

69 わさとまいらせん(一九六五) こなたより返事はせんと也(四

ウ)

70 あるましき事をそ(一九六九) 源氏宮入道宮など皆あやまりなる^{マズ}

事ともなり

71 御哥ともそ(一九六十三) 大弐三位哥の卑下也

72 宣えう殿(一九六五) 東宮の女御也

73 恋わたる(一九七四) 狭衣哥

74 一條院の姫宮(一九七五) 一品宮三巻狭衣の北方に成給也

75 ほのかなりしかはにや(一九七六) よくも見定給はさりし也

76 おもひつゝ(一九七八) さ衣哥あはずして朽果へきかと也

77 ちやうしにくるむまで(一九七九) そゝきたるはこく染たる心灑
の字なるへし下細説迄そと切てそきたるとよませたり如此一本そ
めたると有

78 一すんにみてり(一九七九) 菖蒲之古句 蕭然一寸碧 細葉非無

地 千根初絡石 根盤龍骨瘦 花開香細亡 一寸のみとりをみて

りとかきあやまれる歎又此句「一寸みてりと吟しかへ給歎」(五才)

79 うきにのみ(一九八一) 宣耀殿后 淤泥事によせたりと注せり

沈む身はなかく音もなかれすと也根も流ぬを兼たり

80 もしさりぬへき(一九八五) 宣耀殿への心さし也

81 けふはまた(一九八六) 父公けふはまた対面なかりし也

82 内よりめしさふらへは(一九八九) 狭衣詞中宮狭衣兄弟也

83 例ならぬさまに(一九八二) 堀河殿詞中宮違例の由聞しと也

84 風にや茲にも(一九八二) 大宮殿も也明朝迄養生有てまいらせん
と也

85 暑きほとは(一九八二) 中宮も中を退出有て御休息あれかし今御

言侍の詞也

86 またしきに暑さ所せぎとしかな(一九八五) 狭衣参内をくるしく

おもひ給独言也

87 うちわなと(一九九二) 團なとつかひ給て心安くみ給へと也

88 さうかんのくれなゐ(一九九四) 未勸

- 89 ふせんれう(一九九四) 浮線綾
- 90 おひなり(一九九七) 生成也(五ウ)
- 91 権中納言左兵衛督(一九九一) 此多人太政大臣の御子
- 92 宰相中将(一九九一) 宣耀殿の連枝也
- 93 ひとつつゝ心みん(一九九四) 合奏なくして独くとの勅定也
- 94 たれもひとつに(二〇〇四) いつも同前に一人くを斟酌也
- 95 いとかはかりの(二〇〇二) 如此勅定をそむかれんとはおほしめされさりしと也
- 96 年比(二〇〇三) 父公にもおとらす狭衣を思召つると也
- 97 中将の四五のさえ(二〇〇五) さ衣の四五番めの才ほともなき身にて権中納言ことを引給ふこといかゝなれはいつれものかはりに狭衣に琴を申さるゝ也ことは楽器の内別て賞翫と也
- 98 ひとつをさへ(二〇〇八) 勅言横笛計をさへ狭衣斟酌そと也
- 99 いかにつかうまつるましきかと(二〇一二) 勅言也
- 100 かうとしらましかは(二〇一三) 狭衣心中
- 101 うたて虚ことを(二〇二八) さ衣の虚言を申さるゝと勅言也
- 102 おとゝの笛の音に(二〇二八) 父公の笛よりは勝たること也
- 103 皇太后宮(二〇二〇) 先帝の御妹也 姫宮達齋院入道宮(六才) 齋宮など也
- 104 我心ちにもおとろかせ給(二〇三三) さ衣の心とあり如此なりはより御袖もしほる計迄帝の御ことなるへし
- 105 あさみ(二〇三九) 感する心と有
- 106 いなつまの(二〇三三) 狭衣哥 天上せんの心也
- 107 此世の物にはあらず(二〇四三) 狭衣君を也
- 108 雲の幡手に(二〇四七) 如幡手なる雲也
- 109 わか御身も(二〇四七) さ衣を天上させては帝も此世には御座有かたく思召也
- 110 いとはしくおほさるゝ(二〇四〇) さ衣の文章の詞也
- 111 雲のこし(二〇五三) 雲輿也
- 112 あやうくうしろめたく(二〇五八) 狭衣の此世に心とゝめ給ましきことを帝の御心也
- 113 この宮をはたくひなく(二〇五二) 女三宮みをは尋常の人にはあはせ給ましきとおほし召也(六ウ)
- 114 大殿には(二〇六三) 堀川殿也
- 115 蔵人所(二〇六四) 撰関の家にも有と也
- 116 更にうつゝの(二〇六七) 狭衣天上のよし伊与守云たる也
- 117 ちくまの河(二〇六六) 引哥未考
- 118 へいのつらく(二〇六四) 屏也 顔頭いつれもほとりの心なるへし
- 119 殿上の口にさし出(二〇七三) 父公の御退に狭衣の出給
- 120 いかなりけることそ(二〇七六) ちゝ公の詞
- 121 何ことも(二〇七〇) 帝へ堀河殿の詞
- 122 むさい(二〇七二) 無才也
- 123 見あかせとや(二〇七二) 見あきらむる心也
- 124 又たくひも(二〇七五) 男子狭衣一人也
- 125 かはらぬさまをみせさせ給へる(二〇八六) 帝のとゝめさせ給へる故と也
- 126 みのしろも(二〇八二) 御製 天人の替りには女二宮をまいらせんと也
- 127 さにやと心つる事あれといてやむさしのゝよるの衣ならまし(七

オ) かはけにかへまさりにもやおほしましと(二〇八十二) 女二宮の事と推量ながら源氏宮ならば天人よりもまさらむと思給心中也

128 むらさきの(二〇八十五) さ衣か 心は源氏宮をむらさきと誦給へとも女二宮も御ゆかりはなれぬ中なれば鬨分せたまはぬと也

129 むかひの岡はなれぬ(二〇九十一) むさし野のむかひの岡の草なれば根を尋てそあはれとはおもふ小町

130 おほしめす(二〇九十四) 帝の御心也
131 なく一聲に(二〇九十四) 夏のよの伏かとするは時鳥なく一聲にあくるしのゝめ

132 いかにごうし(二〇九十七) 困也 須磨巻にあり

133 ぶよう(二〇九十九) 御膳も用給はしと也
134 わか御かたへ(二〇九十九) さ衣のかた也

135 今宵はごなたに(二〇九十二) 母宮の御かた也
136 木幡のそうつ(二二〇一) 三井寺御堂白殿の孫に此名有しと也(七ウ)

137 家司職事(二二〇四) 堀河殿の家司職事也

138 さるましき(二二〇八) 源氏宮ゆへ也
139 うへの(二二一〇) 帝也

140 御身のしろは(二二一〇) 女二宮也
141 紫のならましかは(二二〇一十一) 源氏宮ならはと也

142 色く(二二〇一十三) 狭衣哥 源氏宮より外には衣をかさね給はしとおほしめす也 此哥より狭衣の号有

143 ねぬに明ぬと(二二〇一十五) 夏のよをねぬに明ぬと云置し人は物をやおもはさりけむ

144 ほのく^(レ)と明行山きは春の明ほのならねと(二二一二) 清少納言枕草子に春は明ほのやうく^(レ)しるくなり行山きはと有此詞をとり(レ) 書り山きはく^(レ)にて峯の事なるへし

145 花たち花に(二二一三) けさき鳴いまた旅なる時鳥花立花に宿はからむ(八オ)

146 よもすから(二二一五) 狭衣哥 時鳥の如鳴とも知人もなしと也
147 身色如金山端巖甚微妙(二二一七) 法華序尺尊法華を説給んとての瑞に白毫相のひかりにて東方八千の世界をてらし給へる時に

東方の国土の仏現し給身相のいみじき事をいへる文也これを放光瑞と云他土の六瑞の内也此土六瑞あり 此時此文像誦の心は天人の降段他土の仏の出現身相のいみじきに思ひよそへたまふなるへし

148 いつちかまかり出む(二二二一) いつ方へも出ましきと也
149 たいへわたり給ぬ(二二二一) さ衣の対也

150 水こひとり(二二二六) 夏の日にもゆる我身のわひしきは水乞鳥の音をのみそなく極暑の時なく鳥と也胸火のごとく赤也水をのまんとすればかけうつりて火の如くなる故えのまさると也

151 いとあつきほとに(二二三一) 狭衣の詞(八ウ)

152 齋院よりも(二二三二) 源氏宮の答 齋院は當今女一宮也

153 在五中将の日記(二二三六) 日記と云物不見と也伊せ物語の事成へし 源氏角縁巻 一品宮と匂宮との事^(レ)此繪有

154 よしさらは(二二三九) 狭衣哥昔の跡はいせ物語繪也
155 又いとかう有ましう(二二四三) 伊せ物語いもうとのいとおかし

けなるを見をりて此段妹にけさうする事なるへし源氏宮も狭衣も兄弟のごとくに生立たまへは此類昔も侍けるとはかけり

- 156 かく計(二一四六) 狭衣哥室の八島の煙も我ごとく思ひこかれて
 けしふるかと問度となり
- 157 おそろしきゆめをみる心ち(二一四八) 源氏宮の心
- 158 岩きりとをし(二一四四) 吉野河岩きりとをし行水の音には立し
 こひはしぬとも よく叶へり
- 159 かよはぬ里(二一五一) 引哥有歎心は思ひにたへぬ身とならば人
 倫たえたる山へも人侍らんと也(九才)
- 160 君もかほのけしきや(二一五五) さ衣
- 161 さるへき人々の御あたりならて(二一五九) 眞実の親ならぬをお
 ほししらるゝ源氏宮の心中
- 162 たれもかゝる心をも知ぬ(二一五二) 源氏宮の心狭衣好色を也
- 163 有てうき世は(二一五三) 有て世の中はてのうけれは此哥の心な
 るへし
- 164 よさり中宮の(二一五六) 父公詞
- 165 うへもひとひあまりとりこめたりと(二一五六) さ衣を父公の同
 車にて退出已後参内なければ帝もか様に勅定有しと也
- 166 いたく侘させ奉る(二一六八) 源氏宮を東宮へまいらせられぬと
 帝の恨給と也
- 167 右のおほいと(二一六九) 此姫君東宮へまいらせらるゝ事有
 増計也
- 168 聞へあはせ給を(二一六五) さ衣へ父公相読也
- 169 つるのことそかし(二一六五) 源氏宮東宮へ参給事也
- 170 人の事をのへさせ給はん(二一七二) さ衣詞右大臣姫君東宮
 (九ウ) へ参給事を延引いかゝと也
- 171 此御ことは(二一七二) 源氏宮はいつにても参給はんと也

- 172 權中納言(二一七三) 大政大臣子也 權中納言右大臣の姫君を心
 かけらるゝ故春宮へ参給事をいそかるゝと也
- 173 此御かたには(二一七五) 源氏宮にはえならひ給はしと也
- 174 そんなう達(二一七六) 孫王也 右大臣王氏と見えたり
- 175 はなたかに(二一七六) 枕双子はなたかくひたるものいにくし
 と有
- 176 身つからくゆる宮はら(二一七七) 今姫君は一条院の后宮の童也
 宮腹にあらず但后宮の宮女なれば何となく宮腹と云たるか又宮童
 を落字したるか
- 177 思ひかけさりし宵のほかけ(二一七八) 狭衣君右大臣の娘をかい
 まみしたまへる事此物語の面_二は見えされとも有とみるへし源氏
 物語_一此類おほし
- 178 わかゝりし時(二一七九) 狭衣の此姫君を見給へる物と顔色にて
 推量し給て御身上の昔の事をかたり給へり(一〇才)
- 179 故院のこととは(二一七九) 堀河殿の父帝侘事は御憐愍ながら
 好色の事は御制禁有し也されと身をぬすまるゝやうにしてくまな
 く女をも見たまひしと也
- 180 えさらぬ人数多(二一七九) 北方曆ことして三人有
- 181 独あるはをのつから(二一八四) 独住なればをのつから好色の上
 によからぬ事出来ると也女二宮を承引あれかしの下心なり
- 182 うちくにもあなひ(二一八六) 女二宮の事こなたより申されぬ
 は不可然事そと也
- 183 あなむつかしや(二一八八) 是_{ヨリ}衣なりける迄さ衣心
- 184 御けしきかたしけなかりきと云ながら(二一八八) 是より詞
- 185 さはかりの(二一八八) それ計也かりそめなど云詞也

186 聞へさせてんや(二二八12) 此方より申やらんも不礼なるへしと

也

187 心にいらぬ(二二八13) 父公の心中

188 たちまちにこそいはれさらめさの給はせんを(二二八14) 勅許有

し(一〇ウ) 事を知すかほならんは僻事なりとて御気色よからさ
りし故狭衣立給也

189 ほかさまに(二二九2) さ衣哥 源氏宮を置いてよそへは心をつつ

さしとなり

190 あつげにや(二二九4) 母宮詞

191 見あつめ給ひけんに(二二九5) 父公かいまみの事御物かたり有

し故なり

192 夏やせは糸せ物の事にとかや(二二九8) 物おもひにてやせたる

を夏やせにまきらかすを糸せ物と書るにや

193 かたへすゝしき(二二九8) 風や吹らむの詞計か風にしたかひて

ゆく末なくならむもあしかるへき事かはと也

194 などかうしも云初けんわたくし守にやとはまし(二二九9) 一本問

へき事も無にとて 此詞或問書曰わたくし守は伊せ物語名にしおはゝ
いさことゝはん都鳥我思ふ人は有やなしやとの哥の心を取かへて

云たる物也なとかうしも云初けんとは夏や(一一一才) せは物思

ひの有人の事とは何として云たるそ我は思ふ人有か無かと問へき

事もなしと云心也

195 みちのはてなる(二二九12) 東ちの道のはてなる常陸帯のかこと

計もあはんとそおもふさ衣を心かけたたる女の有しかことほりなる

と云心也

196 残ゆかしき(二二九14) かこと計もあはんと云を残ゆかしきとの

給へり

197 聞えけるにや(二二九15) 中勢の吟をさ衣の聞付給へるを也

198 とのゝ女三宮に(二二〇1) 狭衣の詞

199 大宮聞給てめさましく有ましきことゝむつかり給ける物を(二二〇

2) 大宮は女二宮母后也等閑ことをさへ母后の聞給へはたゝな

らす立腹有けるをなましみに女二宮の事申出たらは必物はしたな
められんときさ衣心やましからむと也女二宮の事とかく心には

さるゆへにさ衣の色く云のかれ給也こゝもと古説誤る歟(一

一ウ)

(頭注) 中宮とさ衣は御兄弟なれば疾妬の心にてさ衣の事をもよ
からす母后の思召故にかたりなし給なるへし)

200 只さはかりの御けしきにて(二二〇1) 帝の女二宮をゆるさんと

有計にて横笛のときの面目は有けると也

201 うへもあされたりと(二二〇5) 帝も心浅き様におほさんと也

202 よすかともなれかし(二二〇7) 陰の小草におもふやうなる事無

は幾世も有ましき世に独住にてあらむとなり

203 ゆゝしき事なの給そ(二二〇10) 幾世も有ましきと有をつけての

詞なり

204 わか御心にこそあらめ(二二〇10) 畢竟狭衣の心まかせと也

205 あなちにも何かは(二二〇11) 句 まいて母宮 女二母后也

206 あるましき事にこそは(二二〇12) 句 一曰三位の物かたりせし

坊門上の兄弟也此段母后の心にさ衣を嫌給はゝいかゝと也さりな
から三位の物かたりせられしは笛の音のめてたきにより女二宮の

さかりにおはしますを譲らんと帝の伝られしと語られし也されは

かたしけなく聞過ぎむも如何と也

207 かくたにの給はゞ(二二二一) さやつにも勅詔ならはいかゞせん
 とて立給也(二二二才) 畢竟心にいらぬ故也

208 まことかのよもきかもとは(二二二四) 前に女方より逢のうた読
 かけし事也此段夕貞巻の傍なり

209 めのはらから(二二二七) 長門守か妻の兄弟也

210 少将のめのと(二二二九) 中勢卿の乳母也

211 大納言の五節に(二二一〇) 此事有へし

212 中宮出させ給ぬれば(二二一一) 前中宮退出の事父公の作しなり

213 ^(女) なたかちにそ(二二一三) 父公も中宮故坊門上の御かたのみ
 におはします也

214 宮の御有さま(二二一三) 中宮の御事也

215 おほきおとゝの御方(二二一四) 洞院上

216 なかのこのかみにてもと柏(二二一四) 堀川殿北方三人の内とし
 のまさりたるとみえたり石上ふるからをのゝ本柏もとの心はゑら
 れなくに堀河殿嫁娶のはしめ洞院上とみえたり

217 中将君は有し室の八鳥(二二一五) 源氏宮へ烟にもとへの哥前に
 有(二二二才)

218 ほのかなりし御手あたり(二二一八) 源氏宮のかいなをとらへ給
 事前有

219 をは捨山にのみ(二二一八) なくさまぬ心也

220 入ぬる磯なるか(二二一〇) 春宮の御詞狭衣の御無音を恨給也

221 みたり心ち例ならず(二二一一) さ衣詞

222 何心ちにか常にあしかるへきそ思給事そあらむ(二二一三) 東宮
 の御詞物おもひゆへなるへし隠立無申給へと也

223 心ちのあしかる計は(二二一五) さ衣詞病気なる程は何の思ひか

あらむとなり

224 源氏の宮はかくやおはすらん(二二三二) 春宮御心中

225 なかすみの侍従(二二三六) 古物かたりなるへし 此物語に源氏
 宮と狭衣とのやうなる事ありとみえたり

226 おとゝもかゝればつれなき(二二三七) 狭衣の源氏宮に思入給ぬ
 るを父公もしられ給ぬへければ春宮へ源氏宮をまいらせれぬと也
^(未書)

227 人のとふまで(二二三八) 忍ふれと色に出にけり我恋は物や思
 (二二三才) と人のとふまで 春宮の御推量の如なれば也

228 さらぬすきくしさをたに(二二三一〇) 源氏宮のことは申に及す
 其外にもすきくしき事は無と也

229 なと有かたき恋の山(二二三一〇) 常の好色をさへし侍らぬに源氏
 宮へは有かたき恋なればなとかし侍らむと也

230 あなうたて(二二三一二) 春宮詞

231 御心ならひなめりとて(二二三一三) さ衣詞東宮さやうの好色ある
 御心ならひとてわらひ給也

232 わか心(二二三一四) 狭衣哥 ^{六帖} まめなれとよき名もたゝすか
 るかやのいさ乱なむしとるもとろに春宮の源氏宮へさ衣の好色有
 との給へはよき名もたゝすよくなへる歌

233 心ならひはけにさもや(二二四一) 春宮詞源氏宮はさ衣の真なら
 ぬ兄弟也春宮にはさやうの御兄弟持給はぬ也

234 今宵はかひも(二二四二) 狭衣の心宮耀殿へ密通の事也

235 女くるま(二二四四) 飛鳥井君太秦にこもりたるを仁和寺威儀
 (二二二才) 師ぬすみてゆく也

236 まろかしらのみゆるは此車を見るなるへし(二二四五) 丸頭は法
 師也源氏手習巻 まろなるかしらつきと有 狭衣の車を見る也

- 237 あやしひかめかと(二二四六) 法師にてはなきかと思召也
- 238 わらはへのもたる物や(二二四七) 僧の具也
- 239 母うへの物にこもりて(二二四三) 偽を云なり
- 240 此車をとめて(二二五二) さ衣詞わか車をとめて通せと也
- 241 仁和寺に何かしいき(二二五六) 威儀師は法事を掌る物也
- 242 女車とそ御覽すらん(二二五〇) さ衣車を女車と僧のみて如此と也
- 243 只とくやれと(二二五〇) 威儀師が童に申付たる也
- 244 師にはしたかへと云法文(二二五〇) 提婆品 即随仙人供給所湏採菓汲水拾薪設食乃至以身而作床座身心無倦 是從師の法文なりとそ
- (頭注「尺迦越經^ニ説^ニ第一子事^ル師^ニ有^ニ五事^一其^ニ三士所^レ教^レ隨^ハ之^ニ」)
- 245 おもひたる(二二五三) 句 おかしうなりて 供奉の人々の躰^レ(二四才)
- 246 せいするをきかて(二二六一) 句 いくらん所は
- 247 御たいまつ(二二六四) 續松なり
- 248 ぬすまれたらむは(二二六六) 狭衣の心
- 249 あすか井にやとりとらせんともかたらひにく^ハ(二二六二) 雀馬案
あすか井にやとりはすへしかけもよしも紐寒しみまくさもよしやとりさせんもいか^ハと思ながら又ゆかしければ車へのりうつり給なり
- 250 いとたとくしき(二二六四) たそかれ過る時鳥なれば也
- 251 あないとをし(二二七一) 狭衣詞
- 252 よしの^ハ山にとは(二二七三) もろこしの吉の^ハ山にこもるとも

- をくれんと思ふわれならなくにいつくまでをくれまじきとはおもはて女をうち捨てにけぬるをつらくはおほさすやとなり
- 253 まろいぬ(二二七四) 丸犬とは法しの事と見えたり
- 254 さばかりにやと(二二七七) 心はつかしけなる狭衣の躰なれば心(二四才)くるしけれとも云心也
- 255 ありつるゆ^ハしき物(二二七九) 法師也
- 256 さらはまかりぬへき(二二七四) さ衣詞也
- 257 おはしぬへき(二二八一) 狭衣のかへり給へきかと女の心也
- 258 なき聲は(二二八二) 泣聲なり
- 259 堀河とはいつくとかや(二二八四) 女詞
- 260 をくらむとおほしつれと心やすけなる里の(二二八六) をくらせんと思召せともはれかましからぬ所なれば車より下給はて御自身送給なり
- 261 をしあてに(二二八三) うつまさより童の云つる詞をつけて狭衣の推量によくいはせ給也
- 262 いま^ハて出させ(二二八五) 宿の人の詞也
- 263 わか心(二二九二) さ衣哥我恋は空しき空に満ぬらし思ひやれとも行方もなし此哥にて蚊遣火をとりあはせたるなるへし(二五才)
- 264 めてたくはつかしけなるにそ(二二九三) 狭衣躰也
- 265 おほえなくあさましき有さまを見給ふもたれにかあらむいかにしても有つる物に見えしと(二二九四) 法師に見えしとおもふ心計にて此宿を教つるを女のはつかしく思ふこ^ハる也
- 266 五十計なるおと^ハの(二二九八) 飛鳥井君の乳母也
- 267 大輔君や(二二九〇) 追の車にそへたる人なるへし

- 268 おほへなき人きたりとて (二二九13) 狭衣詞打たゝかんかと也
 269 さるへきにや (二二〇4) 宿世ならむとなり
 270 いてやうとましかりつる (二二〇5) 法しに手馴つらんと思給ふ也
 271 かゝる道行人を (二二〇7) 狭衣詞
 272 をりなむとすれば (二二〇8) 車より女のも
 273 なといらへをたに (二二〇9) 狭衣詞
 274 とまれとも (二二〇11) 飛鳥井君哥道のしるへはうれしけれとも
 とまり給へと申へき所にてもなしと也前の詞 (一五ウ) をうけて也謡物にやとりはずへしとあれは也此哥より飛鳥井の君の名あり
 275 その水かけ (二二〇12) 水もひもとあれはなり
 276 あすか井に (二二〇13) 狭衣哥 かけみまほしくて舎らはみまく
 さ隠にかの法しのゐてとかめんかと也
 277 はしつかたに引とゝめ (二二〇11) 女を狭衣の引とゝめ給也
 278 家の人々いかなる事そと (二二〇15) 狭衣を人々不審するほどに
 御車も参たる躰を聞給へとも立給はぬ也
 279 たれとたにしらぬを (二二〇18) さ衣を女の心中
 280 うたかはしかりつる (二二〇19) 法師に心清く定事なくは我宿執にてかゝる事の有けるよと不浅思食也
 281 かねていみしう (二二〇11) やむこと無方に内々心を尽して逢給たるよりもめつらしくて此女に心のとまる也下紐に源氏宮のことあり如何たれにてもか様の事とみるへし
 282 此女はそちの中納言 (二二〇14) 景図をかけり (一六才)
 283 くるまなとも又かる人なくて (二二〇14) 此法しにかりける也
 284 有つるうし飼 (二二〇15) 乳母の本にきて二条にての躰をさきにかたりし也
 285 かくておはしたる也けり (二二〇18) 女君を同車にて狭衣のおはしたる也
 286 おもひなけく (二二〇11) 威儀師が無音を乳母のなけく也
 287 此人かくて (二二〇12) 乳母詞威儀師が事
 288 源氏宮の内参 (二二〇13) 春宮へ参給あらまし前有女なれば内参とはいひたるへし
 289 しらすよるつたゝ (二二〇12) 飛鳥井君詞不忍の身上なればなにもわきまへかたきと泣給也
 290 我も打なきぬ (二二〇13) 乳母も也
 291 又ある人々一日も (二二〇13) 人々飛鳥井君の前にて物語也
 292 別當殿の御子 (二二〇15) 検非違使別當の息少将と狭衣の名をかり給也 (一六ウ)
 293 かとのおさ (二二〇16) 看督長 別當の下司なるへし
 294 此比はおちて (二二〇18) 別當をは恐るゝ也
 295 此君には (二二〇19) 少将をさすなり
 296 としおひて侍れば (二二〇19) 乳母わかことを云也
 297 打なきて (二二〇12) 女君の躰也
 298 たれをたのみてかは (二二〇13) 女君の詞
 299 哀に心くるしければ (二二〇14) 乳母か心此段詞つゝき相違せるやう也乳母先は少将にかたらひ付給を心よからす思によりてかやうに申たれとも女君の乳母に離かたきやうにのたまふまゝ心くるしうなりてさらは奥列へさそはんと云心なるへし
 300 君はみなれたまふまゝに (二二〇1) 狭衣心を双子地也

301 またるゝよなくもなく(二三四七) 女君の侍間もなく返給也

302 吉祥天女(二三四九) 源氏品定に此名あり

303 いと物けなき(二三四一〇) 所からなともよからぬ事をと各云也

(一七才)

304 けしきにて(二三四一一) 見をき奉るへきにもあらず 乳母東

へ下るへきに君をのこし置てもいかゝ又具し奉らんもいかゝと也

少将かよひ給へは何として世を過し給はんと泣也

305 しはしのほとたに(二三四一五) 女君詞

306 さらは出たち給ふへき(二三四五) 乳母か詞奥列へ下り給へきか

となり

307 御心さし有ける人(二三五五) 少将事

308 あきましき有さま(二三五五) 乳母か身上の事也

309 たれとたにしらせ給はぬ(二三五八) 狭衣の名隠しの事也

310 かくこそなと(二三五九) 東へ乳母のくして下ると云事を狭衣に

女君の申にくき也

311 なをかくおほつかなき(二三五一一) 狭衣心我君をも隠し給事など

を頼かたく思て思乱たるかと計思給也東へ下向也事を知給はねは

也

312 又わか行末をも(二三五一二) 飛鳥井君も名をあらはさぬ也(一

七ウ) しら波の寄る渚に身を尽す海人のこなれは宿も定すこゝも

と源氏夕顔巻にゝたり

(校異)

1 発書 発言(他本)

6 狭衣君 狭衣衣(龍)

12 古哥未考 古哥未考(龍)

12 山吹の 款冬(龍)

19 幼生 幼少(龍)

34 沙婆 娑婆(他本)

38 汐みては 塩みては(龍)

39 いとも いとゝ(他本)

40 いかゝ ナシ(龍)

40 此作者に 此作者(龍)

42 花巖經之結之經也 花巖經之結經也(他本)

42 梵網經上卷アリ 梵網經上卷ニアリ(他本)

45 すかれて すかれて(他本)

51 万 万葉(他本)

51 源氏ににたるも 源氏宮に似たるも(他本)

53 書事 いふこと(他本)

56 御ゆこん 御ゆいこん(他本)

56 先帝 先帝也(他本)

59 未勤 未不勤(龍)

59 思ひあはせらるゝ 思ひ合たる(龍)

70 あやまり あやにく(他本)

74 三卷 三卷二(他本)

77 如此 如何(他本)

78 菖蒲之古句 菖蒲之古句二(他本)

83 聞しと也 聞しかと也(龍)

84 大宮殿 大臣殿(他本)

104 如此 如何(他本)

113 女三宮 女二宮(他本)

131 夏のよの 夏のよは(龍)

142 狭衣の号 狭衣の名(龍)

- 144 とり 書り (424) とりて書り (他本)
- 144 山きは 山き (伊)
- 144 こゝにて (424) こゝにては (他本)
- 147 像誦 讀誦 (他本)
- 147 此土 此土二 (他本)
- 162 狭衣好色を也 狭衣好色をいふ也 (龍)
- 175 枕双子 枕双子に (他本)
- 175 いとにくしと有 いとにくしと有 (龍)
- 179 されと されとも (他本)
- 192 書る いへる (他本)
- 194 一本問へき事を無にとて コノ後二他本「本説あるへし未考」アリ
- 194と195の間に他本「人のやうにわかき人々見奉る 母宮の女房也」の項目アリ
- 198 女三宮 女二宮 (他本)
- 211 此事有へし ナシ (龍)
- 212 前中宮 前の中宮 (他本)
- 213 なたかちにそ こなたかちにそ (他本)
- 236 源氏手習巻 源氏手習巻に (他本)
- 241 何かしいき 何かしいきし (他本)
- 259 堀河とは 堀川と (伊・国)、堀河は (龍)
- 261 よくいはせ給也 かくいはせ給也 (他本)
- 284 躰 程 (龍)
- 288 前 前二 (他本)
- 289 飛鳥井君 飛鳥君 (国)
- 290 打なきぬ 打なきつ (龍)
- 307 少将事 少将事也 (他本)
- 308 あきましき あさましき (他本)

(付記)

本稿は平成十三年度九州大学国語国文学会における口頭発表の内容を基にしたものである。貴重な資料の閲覧を御許可下さった阪本龍門文庫に心より御礼申し上げます。

また、伊達文庫本については国文学研究資料館の、国会本については国立国会図書館のマイクロフィルムを用いた。

(たむら たかし・九州大学大学院修士課程)